

点耳薬

製品群No. 71

ワークシートNo.44

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ	D 濫用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果
評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ	薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)				
		併用禁忌(他 剤との併用 により重大な問 題が発生する おそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの					使用量に上 限があるもの	過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被 害のおそれ		
フェノール	フェノール	本剤は、使用 濃度において グラム陽性 菌、グラム陰 性菌、結核菌 には有効であるが、芽胞 (炭疽菌、破 傷風菌等)及 び大部分の ウイルスに対 する効果は期 待できない。					頻度不明(過 敏症)		・損傷皮膚及び粘 膜(吸収され中毒 症状発現)				・原液または濃 厚液が皮膚に付 着した場合には 腐蝕及び吸収さ れ、中毒症状を 起こすことがある ・眼に入らないよ うに注意すること。 ・本剤は必ず希 釈し、濃度に注 意して使用する こと。 ・炎症または易 刺激性の部位に 使用する場合には、濃度に注意 して正常の部位 に使用するよりも 低濃度とすること が望ましい。 ・外用にのみ使 用すること。 ・密封包帯、ギブ ス包帯、パックに 使用すると刺激 症状及び吸収さ れ、中毒症状が あらわれるおそ れがあるので、 使用しないこと。 ・長期間または 広範囲に使用し ないこと。[吸収 され、中毒症状 を起こすおそれ がある。] ・誤飲を避けるた め、保管及び取 扱いには十分注 意すること。	長期間に使用 しないこと。 ・吸収され、中毒症状 の発現のお それ。]	効能・効果 用法・用量(本 品希釈倍数) ・手指・皮膚の消毒:フェ ノールとして1.5~2%溶液 を用いる。(50~67倍) ・医療用具、手術室・病室 ・家具・器具・物品などの消 毒:フェノールとして2~ 5%溶液を用いる。(20~ 50倍) 排泄物の消毒:フェノール として3~5%溶液を用い る。(20~33倍) 下記疾患の鎮痒 薬(小児ストロフルスを 含む)、じん麻疹、虫さされ 液 フェノールとして1~2%溶 液を用いる。(50~100倍) 軟膏:フェノールとして2~ 5%軟膏を用いる。(20~ 50倍)	
アミノ安息香 酸エチル	アミノ安息香 酸エチル軟 膏「マルイ ン」を使用						過敏症		本剤に対し過敏症 の既往歴				眼には使用しな いこと。		適宜患部に使用する。	下記疾患にお ける鎮痛・鎮痒 外傷、熱傷、 日焼け、皮膚 潰瘍、そう痒 症、痔疾

点耳薬

製品群No. 71

ワークシートNo.44

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ	D 差用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果								
評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意す べき副作用のおそれ	薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)			スイッチ化 等に伴う使用 環境の 変化	用法用量	効能効果		
		併用禁忌(他 剤との併用により 重大な問題が 発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの							薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	使用量に上 限があるもの				過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被 害のおそれ
塩酸プロカイ ン	塩酸プロカ イン注「ホエ イ」 局所麻酔に 類似のため 使用	合成局所麻 酔薬の原型 であり、感覚 ・迷走神経線 維のNa <sup>+</sup> チャ ネルを遮断 し、活動電位 の伝導を抑制 することにより 局所麻酔作用 を発現する。粘 膜への浸透性が 悪いので表面麻 酔としては無 効である。代謝 産物が血管拡張 作用を有し、速 やかに吸収され るのでエピネフ リンの添加が必 要である。			痙攣、痙れ ん等の中毒 症状(頻度不 明)	ショック(頻 度不明)	頻度不明(ね むけ、不安、 興奮、霧視、 めまい、悪 心・嘔吐、メ ヘモグロビン 血症)	頻度不明(過 敏症)		重篤な出血や ショック状態(腎 椎、硬膜外麻酔 時：症状が悪化)、 注射部位またはそ の周辺に炎症(腎 椎、硬膜外麻酔 時：効果が急激に 発現)、敗血症の 患者(腎椎、硬膜 外麻酔時：敗血症 性の髄膜炎がおこ るおそれ)、メヘモ グロビン血症(腎 椎麻酔を除く) (症状が悪化する おそれ)、本剤また は安息香酸エステ ル(コカインを除く) 系局所麻酔薬に 対し過敏症の既往 歴	高齢者、妊婦また は妊娠している可 能性のある婦人、 妊婦末期の婦人						使用に際し、目的濃度の 水性注射液として使用する。 腎椎麻酔(腰椎麻酔) 5~10%注射液とし、通 常、成人には塩酸プロカイン として、低位麻酔には50 ~100mg、高位麻酔には 150~200mgを使用する。 硬膜外麻酔 (基準最高用量：1回 600mg)1.5~2%注射液と し、通常、成人には塩酸プロ カインとして、200~ 400mgを使用する。 伝達麻酔 1~2%注射液とし、通 常、成人には塩酸プロカイン として、10~400mgを 使用する。 浸潤麻酔 (基準最高用量：1回 1,000mg)0.25~0.5%注 射液とし、通常、成人には塩 酸プロカインとして、1回 1,000mgの範囲内で使用 する。歯科領域麻酔 2%注射液にエピネフリン を添加したものをを用い、 伝達麻酔、浸潤麻酔に は、通常、成人には塩酸プロ カインとして、10~100mg を使用する。 ただし、年齢、麻酔領域、 部位、組織、症状、体質に より適宜増減する。 必要に応じエピネフリン (通常濃度1:10万~20万) を添加して使用する。	腎椎麻酔(腰 椎麻酔)、硬膜 外麻酔、伝達 麻酔、歯科領域 における伝達 麻酔、浸潤麻 酔	
アクリノール 液	アクリノール 液	グラム陽 性、陰性菌に 有効で、特に 連鎖球菌、 ウェルシュ 菌、ブドウ球 菌、淋菌に対 し、静菌及び 殺菌作用が ある。作用機 序は、生体で アクリジニウ ムイオンとな り細胞の呼吸 酵素を阻害す るといわれて いる。				頻度不明(塗 布部の疼痛、 発赤、腫脹等 潰瘍、壊死)	頻度不明(過 敏症)										大量服用時 には、悪心、嘔吐、 腹痛、下痢、肝 機能障害・外用 にのみ使用し、 内服しないこと	0.05~0.2w/v%の液として 使用する。	化膿局所の消 毒、泌尿器・産 婦人科術中術 後、化膿性疾 患(せつ、よう、 扁桃炎、副鼻 腔炎、中耳炎)
メントール	内服のみ																		

口腔咽喉薬(せき、たんを標榜しないトローチ剤を含む)、口内炎用薬

製品群No. 73,74

ワークシートNo.45

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果
	評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)			スイッチ化等に伴う使用環境の変化		
			併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの					使用量に上限があるもの	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ			
殺菌消毒成分	塩化セチルピリジニウム	スプロールトローチ	口中で頻りに遭遇する病原細菌である溶血性連鎖球菌や黄色ブドウ球菌またカンジダ等の真菌に対して、強力な殺菌作用を現す。				0.1%未満(口腔、咽頭の刺激感等)	5%以上又は頻度不明(過敏症)						口腔内で唾液により徐々に溶かしながら用いる(噛み砕いたり、飲み込んだりしない)(トローチとしての注意)			1回1錠を1日3~4回かまらずに口中で徐々に溶解して使用する。	咽頭炎、扁桃炎、口内炎
	塩酸クロルヘキシジン	塩酸クロルヘキシジントローチ・ヒピテン	抗菌剤の中でも広範囲の微生物に作用する部類に属し、特にブドウ球菌などのグラム陽性球菌には、低濃度でも迅速な殺作用を示す。一方、大腸菌などのグラム陰性菌にも比較的濃度で作用することが知られているが、グラム陽性菌に比べ感受性に幅がみられる。真菌類の多くにも感受性をしめすが、一般的に細菌類よりも抵抗性がみられる。				0.1~5%未満(舌のしびれ、味覚異常、口内炎、黒舌症、胃部不快感、胃部膨満感、嘔吐、下痢等)	頻度不明(過敏症)		クロルヘキシジンに対して過敏症の既往歴				口腔内で唾液により徐々に溶かしながら用いる(噛み砕いたり、飲み込んだりしない)(トローチとしての注意)			通常、1回1錠(塩酸クロルヘキシジンとして5mg)を1日3~5回、2時間ごとに投与し、口中で徐々に溶解させる。	口内炎、抜歯創を含む口腔創傷の感染予防
	ポビドンヨード	イソジンガール	殺菌菌に対する効果。殺ウイルス(コクサッキーウイルス、エコーウイルス、エンテロウイルス)効果を有する。またヒト免疫不全ウイルス(HIV)に対しては、イソジンガールの30倍希釈液で30秒以内に不活化した。その他ポリオウイルスに対しても効果が認められた。				ショック、アナフィラキシー様症状(0.1%未満)	過敏症(0.1%未満)		本剤又はヨウ素に對し過敏症の既往歴	甲状腺機能に異常			抜歯後等の口腔創傷時(血餅の形成が阻害されると考えられる時期)にはげしい洗口は避ける。眼に入らないようにする。用時希釈して使用。含そうにのみ使用			用時15~30倍(本剤2~4mLを約60mLの水)に希釈し、1日数回含嗽する。	咽頭炎、扁桃炎、口内炎、抜歯創を含む口腔創傷の感染予防、口腔内の消毒
	ヨウ化カリウム	内服のみ																

口腔咽喉薬(せき、たんを標榜しないトローチ剤を含む)、口内炎用薬

製品群No. 73,74

ワークシートNo.45

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果				
評価の視点	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化				
		併用禁忌(他 剤との併用 により重大な 問題が発生す るおそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの			使用量に上 限があるもの	過量使用・誤 使用のおそれ	長期使用に よる健康被 害のおそれ			
ヨウ素	プレボダイン ソリューション	・使用濃度 において、芽 菌型細菌(グ ラム陽性菌、 グラム陰性 菌)、結核菌、 真菌、一部の ウイルスに有 効である。 ・細菌、真菌 に対する殺菌 効果、結核菌 に対する効果が 認められる。			アナフィラキ シー様症状 (0.1%未 満)	0.1%未満 (そう痒感、灼 熱感、皮膚潰 瘍、皮膚変 色、接触皮膚 炎、血中甲 状腺ホルモ ン(T3、T4 値等)の上昇 あるいは低下 などの甲 状腺機能異 常)	(0.1%未満) 過敏症		妊娠中及び授乳 中の婦人への長 期にわたる広範囲 の投与	本剤またはヨウ素 に対し過敏症の既 往歴、甲状腺機能 に異常、重症の熱 傷、新生児、産 後、妊婦の腹内 長期投与(新生児 に一過性の甲状 腺機能低下)		眼に入らないよう 注意。外用にの み使用する	妊娠中及び 授乳中の婦 人への長期 にわたる広 範囲の投与 で先天性甲 状腺機能低 下症の乳児、 溶液の大量 かつ長時間 の接触によ って皮膚変色、 接触皮膚炎	1.本剤を塗布する。 2.本剤を患部に塗布する。	1.手術部位(手 術野)の皮膚 の消毒、手術 部位(手術野) の粘膜の消毒 2.皮膚・粘膜 の創傷部位の消 毒、熱傷皮膚 面の消毒
アクリノール 液	アクリノール 液	グラム陽 性、陰性菌に 有効で、特に 連鎖球菌、 ウェルシュ 菌、ブドウ球 菌、淋菌に対 し、静菌及び 殺菌作用があ る。作用機 序は、生体で アクリジニウ ムイオンとな り細胞の呼吸 酵素を阻害す るといわれて いる。			頻度不明(塗 布部の疼痛、 発赤、腫脹等 潰瘍、壊死)	頻度不明(過 敏症)					・大量服用時 には、悪心、嘔 吐、腹痛、下 痢、肝機能障 害・外用に のみ使用し、 内服しないこと		0.05～0.2w/v%の液として 使用する。	化膿局所の消 毒、泌尿器・産 婦人科術中術 後、化膿性疾 患(せつ、よう、 扁桃炎、副鼻 腔炎、中耳炎)	
抗炎症成分	アズレンスル ホン酸ナトリ ウム	消炎作用及 び創傷治癒 促進作用、ヒ スタミン遊離 抑制・白血球 遊走阻止作 用を有する			0.1%未満(口 中のあれ)、 頻度不明(口 腔・咽頭の刺 激感)						抜歯等の口腔 創傷時(血餅の 形成が阻害さ れると考えら れる時期)に はけい洗 口は避ける。		アズレンスルホン酸ナトリ ウムとして、1回4～6mg≪ アズノール錠 2～3錠≫ を、適量(約100mL)の水又 は微温湯に溶解し、1日数 回含嗽する	咽頭炎、扁桃 炎、口内炎、急 性歯肉炎、舌 炎、口腔創傷	
塩化リゾチー ム	レフトーゼ錠	抗炎症作用: 癒着形成・組 織修復作用: 膿液の分解と 排出作用: 出血抑制作 用			ショック、アナ フィラキシー 様症状・SJS 様候群・Lyell 症候群(頻度 不明)	0.1～5%未 満(下痢、胃 部不快感、悪 心・嘔吐、食 欲不振)、 0.1%未満(口 内炎等)、頻 度不明(肝機 能障害 (AST(GOT)、 ALT(GPT)、 Al-P、γ- GTP、LDHの 上昇等、めま い)	0.1%未満(過 敏症)	本剤の成分過敏 症の既往歴、卵白 アレルギー(アナ フィラキシー・シ ョックを含む過 敏症 状)	アトピー性皮膚炎、 気管支喘息、薬剤 アレルギー、食物ア レルギー等のアレ ルギー性素因、両 親、兄弟等がアレ ルギー症状の既往 歴、高齢者		作用機序は 解明されてい ない点も多 く、用量・効 果の関係も 必ずしも明ら かにされてい ないので、漫 然と投与しな い。	1.慢性副鼻腔炎の腫脹の緩解、痰の切れが悪く、喀出回数が多い気管支炎、気管支喘息、気管支拡張症の喀痰喀出困難、小手術時の術中術後出血の場合、通常、成人は1日塩化リゾチームとして、60～270mg(力価)を3回に分けて経口投与する。2.歯槽膿漏症(炎症型)腫脹の緩解の場合、通常、成人は1日塩化リゾチームとして、180～270mg(力価)を3回に分けて経口投与する。高齢者減量	1.慢性副鼻腔炎の腫脹の緩解、痰の切れが悪く、喀出回数が多い気管支炎、気管支喘息、気管支拡張症の喀痰喀出困難、小手術時の術中術後出血(歯科、泌尿器科領域)の場合2.歯槽膿漏症(炎症型)腫脹の緩解の場合		

口咽喉薬(せき、たんを標榜しないトローチ剤を含む)、口内炎用薬

製品群No. 73,74

ワークシートNo.45

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ	D 濫用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果					
評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)			スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化		
		併用禁忌(他 剤との併用 により重大な 問題が発生す るおそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの						薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	使用量の上 限があるもの		過量使用・誤 使用のおそれ	長期使用に よる健康被 害のおそれ
グリチルリチ ン酸二カリウ ム	グリチルリチ ンニカリウム は点眼の み、ここでは トローチが 主なのでグ リチルリチ ンモノアン モニウムの 注射(グリチ ロン注一 号)の添付 文書を使用	抗炎症作用 (1)抗アレ ルギー作用 (2)アラキ ドン酸代謝 系酵素の阻 害作用		甘草を含有 する製剤、 ループ利尿 剤・チアジ ド系および その類似降 圧利尿剤	偽アルドス テロン症(頻 度不明)、横 紋筋融解症 (グリチルリ チン酸または 甘草を含有 する製剤)			アルドステ ロン症、ミ オパシー、 低カリウム 血症(低カリ ウム血症、 高血圧症等 を悪化)	高齢者、妊 婦等、小児				長期適用に よる偽アル ドステロン 症		グリチルリチ ンとして、通 常成人1日1 回40mgを皮 下注射する。 なお、年齢、 症状により適 宜増減する。	薬疹
グリチルレチ ン酸	皮膚科軟膏 はあるが口 内用はなし															
抗炎症成分 トランキサマ ン酸	トランサミン カプセル	・抗プラスミ ン作用(抗線 溶作用) ・止血作用 (フィブリン 分解を阻害 することによ って止血) ・抗アレ ルギー・抗 炎症作用	トロンピン(血 栓形成傾向)	ヘモコアグラ ーゼ(大量併 用により血 栓形成傾向)、 バトキシ ピン(血栓・ 塞栓症)、凝 固因子製剤 (口腔等、線 溶系活性が 強い部位で は凝固系が より亢進)		0.1~1%未 満(食欲不振 、悪心、嘔 吐、下痢、 胸やけ)、 0.1%未満 (眼気)	0.1%未満(過 敏症)	トロンピンを 投与中	血栓、消費性 凝固障害、 術後の臥床 状態および 圧迫止血の 処置、腎不 全、本剤に 対し過敏症 の既往歴、 高齢者						トランキサマ ン酸として、 通常成人1日 750~2,000 mgを3~4回 に分割経口投 与する。高齢 者で減量。	○全身性線溶 亢進が関与す る出血傾向 (白血病、再 生不良性貧血 、紫斑病等、 および手術中 ・術後の異常 出血) ○局所線溶亢 進が関与する と考えられる 異常出血 (肺出血、鼻 出血、生殖器 出血、腎出血 、前立腺手術 中・術後の異 常出血) ○下記疾患に おける紅斑・ 腫脹・そう痒 等の症状 湿疹およびそ の類症、蕁 麻疹、薬疹・ 中毒疹 ○下記疾患に おける咽頭痛 ・発赤・充血 ・腫脹等の症 状 扁桃炎、咽喉 頭炎 ○口内炎にお ける口内痛お よび口内粘膜 アフター
アラントイン	なし															